Club de Amigos de Latinoamérica de Osaka

¡Amigos!

ともだち

CALO

NO.133

2024 年 9 月

最近の CALO 活動

皆さま、ご無沙汰しています。今年の主な CALO の活動について報告させていただきます。

今年の 2 月下旬から 3 月上旬にかけて、研究活動のためにブラジルのサンパウロ市とペルーのリマ市に行くことになりました。せっかくのペルー訪問の機会を利用して、CALO が支援している二つの学校・施設も訪問することにしました。

今回は、アマゾン地区ラマス市にある「Luis Alberto Bruzone Pizarro バイリンガル学校」と、リマ市にある「Aranibar 児童養護施設内の小学校」を訪問し、CALO の翻訳絵本を持参することにしました。

以下に、二つの施設について簡単にご報告させていただきます。

CALO の絵本の配布活動
（真中、筆者）

学校の正門

「Luis Alberto Bruzone Pizarro バイリンガル学校」を視察

新型コロナウイルス以降、CALO として支援する学校は減少し、現地スタッフのジャネットさんを通じてアマゾン地区の学校を支援することになりました。昨年は、皆さんのご協力のおかげで、プリンターとコピー機の寄付を行った学校です。リマ市ではないため、これまで学校訪問はしておらず、どんな学校かは写真でしか見たことがありませんでした。

2 月 28 日（水）～29 日（木）には、リマ市からサンマルティン州のラマス市へ出発し、飛行機で約 1 時間、アマゾン地区のタラポト市に到着しました。そこから車でラマス市に向かいました。私にとって初めて訪れる地域で、不安と楽しみがいっぱいでした。私はペルー人でありながら、人生の半分以上を日本で過ごしており、恥ずかしながらペルーで知らないことが多いのです。

大阪ラテンアメリカの会（CALO）〒540-0043 大阪府豊中市待兼山町 30-28（オチャンテ方）
HP http://calo.whitecafe.jp/ FAX:072-728-6636
銀行口座:三井住友銀行 箕面支店 普通 0429270 郵便振替:00980-0-57563

現地スタッフのジャネットさんから学校の良さを伺っていたのと、インターネットで検索し、学校の取り組みを紹介している論文も拝見したことで、この学校のカリキュラム、活動、環境に関心を持ちました。自分の目で見てみたいと思い、CALOのメンバーと相談の上、訪れることに決めました。

民族衣装を聞いた子どもたちと集合写真

学校があるラマス市は、小さな町で自然が豊かです。トロピカルな環境で、泊まった宿はジャネットさんから紹介してもらったコテージ型ホテルで、バナナ、パパイヤ、アボカドの木が生い茂り、年中暖かく21度から23度と住みやすい環境でした。恵まれた環境に感じました。大きなスーツケースの中には、日本から持参した20冊の絵本と日本のお菓子を入れ、学校に向かいました。この町の移動手段である「モトタクシー」（オートバイの後輪部分に屋根付きの座席シートが付いたもの）に乗り、学校のある「Wayku」（ワイク）地区に向かいました。

学校は児童生徒数が172人の小規模な学校で、夏休みだったにもかかわらず、子どもたちがCALOのために民族衣装を着て学校に集まり、待っていてくれました。この学校の特徴は、ペルーで数少ないケチュア語（原住民が使っていた言語のひとつ）とスペイン語のバイリンガル教育を行っている点で、伝統的な文化を守りながら、クラブ活動として民芸品を作ったりしています。

子どもたちは歌や詩の披露をし、現地のお菓子やラマス市の民族衣装を着た人形のプレゼントをくれました。日本から持参した絵本と日本のお菓子を食べながら、CALOの活動について話し、日本についても説明しました。彼らは日本について非常に興味を持っていて、持参した翻訳絵本にも興味津々でした。

ここで、CALOの絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせを行いました。子どもたちからリクエストもあり、日本語での読み聞かせも実施しました。私はリマ市の学校や多国籍の子どもたちの前で絵本を読んだ経験がありますが、この学校の子どもたちはスペイン語だけでなく、ケチュア語という第二の言葉も重視して使っているため、外国語に対する関心がとても高い子どもたちが多かったです。

日本語での絵本の読み聞かせ

日本語を初めて聞いたりしているはずですが、子どもたちは聞いた日本語を繰り返し、どういう意味なのかを自分たちなりに解釈しようとしている場面を見て、感心しました。これまでの体験では、日本語の音を聞いて笑ったりする子どもたちも多かったのですが、こちらの子どもたちは日本語を繰り返したり、きれいな発音をして、言葉一つ一つを覚えようとしている姿が素晴らしく、その姿が私の目には焼き付けられました。

最後に、学校の施設の紹介とCALOからの寄付であるコピー機・印刷機がどのように利用されているかについて、丁寧な報告を聞くことができました。様々な活動をしている学校ですが、国からの支援は十分でなく、民間や保護者の団結により施設を維持しています。教室の数が足りなくなっているため、将来的には教室を増設したり、校舎の美化に努めたいと語ってくれました。今後、CALOとしてどのような支援をしていくか、CALOの皆さんと考えてみたいと思います。

Perez Aranibar 児童養護施設内の小学校を視察

児童養護施設内の学校正門

2024年3月1日に、もう一つの施設を訪問しました。施設はリマ市にあるため、現地スタッフのジャネットさんと一緒に「児童養護施設ペレス・アラニバル」を見学しました。

外から見るととてもきれいな建物ですが、内部は古くなっており、ボランティアのスタッフが少しずつ修理をしながら、子どもたちにとって使いやすい施設にリノベーションしようとしています。昔からある児童養護施設ですが、設備が整っておらず、老朽化が進んでいて使えない部屋が多いです。学校の責任者はイタリアから来たカトリックのブラザー（修道士）で、特に障がいを持つ子どもたちの教育に専念しています。養護施設には精神的、身体的、知的な障がいを抱えている子どもたちがいるため、イタリア人のブラザーは、そのような子どもたちをサポートするために施設内に学校を作ることにしたそうです。養護施設の許可を得て、古くなり使えなくなった部屋をボランティアの皆さんが掃除し、リフォームしています。実際に教室を見学した際には、ボランティアの皆さんが壁のペイント作業をしていました。

左はジャネットさん、右は私ロサとボランティアの方

CALOが寄付したブランコ

様々な課題を抱えている子どもたちが多いですが、ボランティアの皆さんは家族の暖かさを提供し、学校での勉強だけでなく、中等教育を卒業するまでに何らかの技術を身につけ、仕事が得られるように支援しています。

この学校には、ジャネットさんが管理して、余っていたCALO算数ドリルと10冊の絵本を持っていきました。また、この施設には以前CALOがブランコを寄付したことがあります。子どもたちが遊んでいる場面を見て、写真を撮りました。

ジャネットさんはボランティアとして、こちらの子どもたちに日本語のひらがな、カタカナと簡単な日本語を教えています。日本のアニメが好きな子どもたちとも会うことができました。今後もCALOとしてどんな支援ができるのか検討してみたいと思います。

松田・梶田・ロサ

CALO設立者メンバーとの再会

梶田雅子さんと一緒にCALOを設立（1994年〉した、松田徳子さんが勤務先（JICA）のカンボジアから一時帰国しておられ、7月に雅子さん宅でお会いしました。カンボジアで精力的に活動されている様子をお聞きしました。

コロナ禍以降、CALOの活動は縮小せざるを得なくなり、例会も月に一度だけ開催しています。少ないメンバーですが、無理せず、確実に支援が届く活動を続けていきたいと思っています。ご協力をよろしくお願いします。

例会からの報告

今年に入ってから筆者の海外出張があり、しばらく開催できませんでしたが、夏に入ってから再び1ヶ月おきに集まることにしています。
8月3日：久しぶりの例会を開催しました。メンバーは大人5人、子ども2人の参加でした。
9月12日：例会を開催し、アミーゴスの発送作業を行いました。

CALOの例会予定

1ヶ月おきの開催となっています。
＊急に開催できない時があるので、開催の日程について知りたい方、新しく参加いただく方は一応お問い合わせください。
（ochante@andrew-edu.ac.jp　09083655420　オチャンテまで）

あとがき；ラテンアメリカ、おもにペルーへの支援、交流についてのご意見などお寄せくださるとうれしいです。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。（ロサ）